

「**テーマ：やさしさと社会、そしてわたし
「本当に平等な社会の実現を目指して」**

広島県・広島なぎさ高等学校3年 青山 早智子

私は障がい者という言葉はとても失礼な言葉だと思つ。身体や脳が他の人とは違うと、障がい者だと言われ、その人の外見や言動は好奇の目にさらされる。障がい者と健常者は何で区別されているのか。介護が必要になれば障がい者なのか？ 障がい者という言葉は健常者とされる人が一方的に言つてゐる。人は誰しも自分だけの力では生きていけない。周りの助けが必要な生き物である。それなのに健常者 障がい者という言葉で簡単に分けてしまふのは間違つてゐると私は思う。

私がこう思うようになつたきっかけは今年の五月に怪我をしたことだ。私は体育祭の練習中に転倒し、重度の首の捻挫を負つた。首の筋肉がうまく動かなくなつていたため、しばらくコルセットを着けて生活することになつた。私はこれまで大きな怪我をしたことがない、初めてのコルセットだつた。コルセットは制服を着てると目立ち、自分の姿がみつともなく見えた。家の外に出るのが嫌で学校にも行きたくないという思いでいっぱいだつた。

次の日、朝起きた時から憂鬱な気持ちでいっぱいだつたが、私がコルセットを気にすることで両親を心配させたくないと思い、勇気を出して家を出た。しかし登校中、他の学校の高校生とすれ違つた瞬間、「おじ、見るよあれ」

「うわ、やばいな」

と、彼らの心無い言葉が心に突き刺さつた。そして、電車に乗ると好奇の目が私に集中するのを感じた。助けの声をかけるわけでもなく、携帯電話越しに私を見て、私と目が合うとすぐにそらすのだ。目の前が真っ暗になつた。恥ずかしいような、悲しく、辛いような、一言では言い表せない気持ちが込み上げてきた。

この経験から、体に制限がない人は体が不自由な人を上から見ていると思った。障がい者と呼び、かわいそうだと同情し、自分たちよりできないことが多いと勝手に思つてゐる。これはとても失礼なことだ。確かに、行動に制限がかかることが多いのだろうか。体が不自由でも充実した生活を送つてゐる人がいれば、健康に見えて、心が弱かつたり、と呼ばれる人よりも、健康に見えて、心が弱かつたり、充実した生活を送つてゐる人がいる。障がい者だとと言われても、人付き合いが得意だつたりする人もいる。障がい者だとされても、頑張つてゐる人はそれだけ体に制限がない人より強い。健常者は身体的なハンディキャップを持つ人を助ける立場だと思いがちだが、逆に彼らに勇気を与えられた、という人も多いのではないだろうか。見た目でその人の生活の質は測れない。

私は障がいを持っていることも一つの個性だと考へるべきだと思っている。また、障がい者は自分よりできないことが多いと一方的に思ふのではなく、どんな人でも対等に尊重するべきだ。今こそ、同じ人として誰もが生活しやすい社会を実現させるために、私たち一人ひとりが自分と違う立場の人の生活を理解することが必要なのだ。人任せにしてはいけない。自分が社会の一員だという自覚を持ち、まず一步、歩み寄るのだ。

一九六三年のアメリカでマーティン・ルーサー・キングが、「四人の幼い子ども達が、いつの日か肌の色ではなく人格そのものによって評価される国に住めるようになる」という夢がある」と叫んだように、私も叫びたい。私には全ての人が平等に評価され、お互いを尊重しあえるような社会になるという夢がある…と。そしてこの夢は必ず実現させなければならない。